

〔東女医大誌 第54巻 第1号〕
頁 121～125 昭和59年1月〕

〔学 会〕

東京女子医科大学学会 第255回例会抄録

日 時 昭和58年10月21日（金） 午後1時30分より

会 場 東京女子医科大学 本部講堂

1. TDIのマウス血清蛋白に及ぼす影響について （第二衛生）

○長尾 憲樹・鈴木 信男・石津 澄子

TDI (tolylene 2, 4, diisocyanate) の皮膚に及ぼす影響について、前報では、皮膚に塗布した TDI 消失の経時の変化、そのときの皮膚組織の病理的变化、ならびに皮膚脂質成分の消長に関して報告した。

今回は、TDI を塗布したマウスの血清蛋白分画の変化について検討したので報告する。

実験方法としては、BALB/C 雄性マウス11週齢、各群5匹を使用し、抜毛背部皮膚に TDI 原液（99%）を100 μ l 塗布し、塗布後、1日、2日、3日、4日、7日、12日後に採血し、血清を分離して、サンプルとした。

アガロース (TITAN, GEL) 電気泳動により、血清蛋白分画を行なったところ、ガンマーグロブリン分画が、塗布2日以降増加しているのを見出した。さらに高分解能を持つマイクロ2次元電気泳動を用いて、正常マウスの血清 protein map を求め、その変動について検討した。

2. 生理学教育 Workshop に参加して

（第二生理）菊地 鏡二

第29回国際生理学会議の satellite symposium の一つとして、生理学的教育の Workshop が、シドニー西方182km、ブルーマウンティン西南数キロの Jenolan Caves の Cave House というホテルで行なわれた。

12カ国から39名に家族4名が加わり、会議は8月25～27日まで3日間行なわれた。今回の Workshop を企画した Drs. R. Neame (New-castle), A. Sefton の掲げたテーマは2つで、Integration (Dr. Neame) と限られた装置と実験動物を用いての実習教育 (Dr. Sefton) であった。

前者は computer を導入して生理学に関係した Health Science の教育への試みがなされた。後者は各国の教育事情の相違があることが判明して、各人の抱えている問題点をまず理解することに時間を費した。

演者は最近行なわれ、出版された我が国の生理学教育に関する調査結果の summary と第二のテーマに関してはその線に沿って行なわれている東京女子医大生理学実習の方法の要点を資料として提出した。

参加者の準備は良くなく、次回（1986年）バンクーバーの折は各々資料を持参して、討論を行なうことを約した。全員この Workshop が有意義であったことを認めた。この要点を発表する。

3. マウス主要臓器中の微量金属値

（内科1）○竹内富美子

（無機化学）岩佐 霏子

私達は先に正常マウス臓器中の Cu, Zn および Mn 値を測定し、報告した。

今回は正常マウス臓器中の Cu, Zn および Mn 値を日本ジャーレル・アッシュ製原子吸光装置 AA-845型を用い測定し、前回より容易によき結果を得たので報告する。

対象は健康な成熟マウス BALB/C 雄、雌のおの6匹ずつ計12匹を用い、撲殺後、肝、腎、肺および下肢の筋を剔出し、湿式灰化法で灰化し、前回同様の方法で Cu, Zn および Mn を測定した。

測定結果では、Zn 平均値は肝32.3 (μ g/g wet weight—以下略す)、腎20.6、肺17、筋10.2であり、Cu 平均値は肝6.7、腎4.6、肺2.8、筋1.2、Mn 平均値は肝1.1、腎1.2、肺は雄グループは0.12、雌グループは検出出来ず、筋0.15であった。すなわち、Zn 平均値は、その臓器の Cu および Mn 平均値に比し、いずれも最も多く、またいずれの臓器でも Mn 平均値が最も低値を示し、Cu 平均値はその中間にあった。

これらの各臓器の Zn 平均値を100%とすると、Cu 平均値はその約12%より22%に相当し、Mn 平均値はその約0.3%より6%の微量を示した。

4. 急激な経過をたどり死亡した子宮体部中胚葉性混合腫瘍の1例

（産婦人科）

○高梨 安弘・佐藤美枝子・宇都宮 道・
東館 紀子・和田 順子・黒島 淳子・
吉田 茂子

中胚葉性混合腫瘍は、子宮体部、頸部、膣、外陰部などに発生し、間葉性腫瘍成分と上皮性腫瘍成分とが併存するまれな疾患である。今回私達は子宮原発性中胚葉性混合腫瘍の1例を経験したので報告する。

患者は32歳の未妊婦、主訴は下腹部腫瘍、下腹部膨満感、便秘で、既往歴は特記すべきことはない。初潮14歳、周期順調、30日型、持続7日間、最経月経昭和58年7月2日～8日間、家族歴は父親に糖尿病、高血圧が認められる。

昭和58年8月16日、下腹部腫瘍感にて当科受診、巨大腹部腫瘍と診断される。8月30日腹痛、性器出血、重症便秘、無尿にて緊急入院。

入院時所見は恥骨上部より臍高に至る硬い腫瘍を触知した。検査成績では白血球増加、BUN上昇、血沈亢進、胸部X-Pでは両側横隔膜挙上。腹部X-Pでは骨盤腔より下腹部までの腫瘍陰影、腹水貯留、B scopeでは多房性の腫瘍、右水腎症、腹水が認められた。

開腹時所見では多量の血性腹水を認め、腫瘍は大網、腹膜、腸管と癒着が強く一塊となり、骨盤腔内の浸潤も強度であった。子宮は前傾前屈、手拳大で両側卵巣卵管は強度の癒着、浸潤で不明。そのため子宮腔上部切断術、大網部分切除術施行した。子宮は225g、その他腫瘍塊は2,200gで、タッチスメアーではN/C比上昇、核小体の増大、増多、mitosisを認め、組織学的所見ではmalignant mixed mesodermal tumorで腺癌、肉腫様部分、osteoid形成がみられた。術後経過では高熱、無尿が持続、術後5日目死亡した。

本疾患の予後はきわめて不良で、5年後生存率はI期とそれ以外とでは大きく異なる。本症例はIV期で急激な経過をたどり死亡した1例であり、文献的考察を加え報告する。

5. 一側肺全摘時の血行動態の変動および肺動脈一上大静脈間シャント形成の効果に関する実験的研究 (外科)

○小野田万丈・高橋 敏・鈴木 忠・
倉光 秀麿・織畑 秀夫

緒言：原発性肺癌や転移性肺癌に対する手術適応の拡大と術式の高度化に伴い肺切除術が広く行なわれるようになってきた。一側肺の全摘を行なうことによる肺実質の減少、肺予備血液減少による循環調節機能の障害、残存肺の相対的血流量の増加などにより、肺動

脈圧の上昇が見られ、呼吸機能障害に伴って、遠隔期には循環動態の変動による右心不全を併発してくる考えられている。そこで演者は片肺犬を作成し、術直後の肺動脈圧の急速な上昇に対して、肺動脈一上大静脈間にシャントを形成し、血行動態および血液ガス分析を中心に検討したところ、肺動脈圧上昇に対する予防的効果を認めたので報告する。

実験：一側肺全摘を行なった雑種成犬6頭を対照群とし、一側肺切除後肺動脈一上大静脈間にシャントを形成した8頭を実験群とした。両群において術後3時間にわたり血行動態の変動、血液ガス分析、肺動脈一上大静脈間シャント量を測定し比較検討した。

結果：一側肺摘後、肺動脈圧は両群とも約140%の上昇が見られ、対照群では下降傾向は見られず、実験群では漸次下降し、3時間後ほぼ全摘前の状態にもどった。シャント形成による動脈圧、中心静脈圧、左心房圧等は影響をうけなかった。血液ガス分析では、肺動脈血PO₂の低下、PCO₂の上昇が見られたが、大動血、左心房血ではほとんど変化は見られなかった。これらの結果より、一側肺全摘後、肺動脈一上大静脈間シャントを形成することは、残存肺への血流量の減少をはかり、急速な肺動脈圧上昇の予防に効果があると結論を得た。

6. 乳癌術後の他臓器重複癌の4例 (外科)

○藤波 睦代・神尾 孝子・加藤 孝男・
西 純一・小林 重芳・鈴木 忠・
倉光 秀麿・織畑 秀夫

乳癌術後の他臓器重複癌については、乳癌の長期予後の改善及び追跡率の向上に伴い、近年報告例数が増加している。また一部では術後の抗癌療法の影響の可能性のある悪性腫瘍発生例の報告もある。今回、当科にて昭和42年1月より58年12月までの16年間の原発性乳癌手術症例533例を調査した結果、4例に他臓器重複癌（対側乳腺を除く）が認められたため報告する。発生率は0.75%に当る。この4例は、第1癌、第2癌とも病理像が確認されているが、この他2例に胃癌合併が疑われたものがある。しかし他施設にて加療後死亡し、組織学的裏付けが取れぬため、今回の報告より除外する。

症例1は53歳女で、Stage IIの乳癌術後放射線療法を施行し、3年10ヵ月後に胃癌を確認、症例2は63歳女でStage Iの術後やはり放射線療法を行ない、3年4ヵ月後に胃癌を確認、症例3は58歳女でStage IIの